



『補 う 力』



北海道
函館柳雪館大野道場
小学6年 結 城 咲 心

剣道の竹刀の握りは、左手の小指、薬指、中指の三本でしっかり握るのが基本です。

そう先生は教えてくださいました。しかし、私の小指は、竹刀を強く握ることができません。なぜなら、生まれつき少ししか曲がらないからです。それに気がついたのは、三年生の時のけい古中でした。先生に「左手の小指をもっとしっかり握りなさい。」と注意されました。私は、「しっかり握っているのにどうして注意されるのだろう。」と不思議に思って母に相談しました。母は、私の小指を見て、驚いて、私を病院につれて行きました。そこで初めて、私の小指が少ししか曲がらないということがわかりました。

それからの私は、面が決まらないと小指のせい、小手が決まらないと小指のせい、試合で負けると小指のせい、うまくいかないことは全て小指のせいにしてしまいました。

「正しい握りで一生懸命けい古をしていたら左手にまめができるだろう。」と先生が言うと、みんなは、うれしそうに、左手のまめを先生に見せていました。しかし、私の左手にはまめはできていませんでした。「みんなと同じように、一生懸命けい古をしているのに…。」とくやしい気持ちになりました。体当たりでも、飛び出た小指が相手とぶつかってとても痛くてたまりませんでした。母に、「小指をちゃんと曲がるように治してよ!」と言うと、少し悲しい顔をして、手術のむずかしさを説明してくれました。そして、小指に少しでも力が入るように、ぶつかっても痛くないようにと、スポンジや、シリコンを小指に巻いてくれました。

ある時、私は、自分の左手にまめができていることに気がつきました。そのまめは、小指の所ではなく、薬指と中指の所にできていました。私は、うれしくなって、母に左手を見せました。「しっかり握れるようになったね。」と母もよろこんでくれました。そして私は、自分の左手を見て、気がついたことがあります。それは、一本が使えなくても、あと四本あるということ。小指は、竹刀を握るためには、大切な指だけど、それを補う力を他の指がつければいいんだ! ということでした。

六年生になった私は、小学生のキャプテンになりました。補う力をつけた四本の指は、私に自信を持たせてくれました。けい古が辛い時、くじけそうになっている仲間がいたら、「ファイト」、「がんば」と言ってはげますようになりました。試合に出る時は、五人で戦います。私が私の小指のように、うまく動けなくて、負けてしまっても、他の四人が力を貸してくれました。逆に、うまく動けなくて、負けてしまった仲間がいたら、全力で力を貸しました。

「補う力」という意味は、足りないところをうめて満たすという意味があります。私は、剣道でこの「補う力」を学びました。自分自身に、足りないものを自分自身で補う力。

仲間に足りないものをみんなで補う力。何かを補うには、努力と協力が必要だということも学びました。

私は、剣道を五歳から始めて、今年で八年目になります。つらかったこと、うれしかったこと



がたくさんありました。そして、来年は、とうとう中学生になります。竹刀も重くなるし、体当たりも、はげしくなって、私の小指は、悲鳴をあげるかもしれません。くじけそうになるかもしれません。しかし、それにも負けずに、努力を重ねて、大好きな剣道を『補い合える仲間』と一緒に、楽しんでいこうと思います。